

「やっと着いた…え、まだあるの？」

石段628段目。参拝者のため息じりの声が聞こえてきます。御本宮と見まごうばかりの荘厳な巨大社殿。この社は金刀比羅宮の末社旭社です。785段目の御本宮まで、あともう少し！！

金刀比羅宮が金毘羅大権現と称され、神社とお寺が混淆していた江戸時代。旭社は金堂と呼ばれていました。金堂とは、本尊を安置する寺院の主要なお堂のことです。当時は、金毘羅大権現=こんぴらさんとも所縁の深い薬師如来像を祀っていたようですが、現在は純粋な神社として、天御中主神・高皇産靈神・神皇産靈神・伊邪那岐神・伊邪那美神・天照大御神・天津神・国津神・八百万神をお祀りしています。

旭社(金堂)は、江戸時代末期の天保八年(1837)、こんぴらさんを信仰する崇敬者の皆さまの寄進によって建立されました。建立は、文化三年(1806)の頃から、既に計画されていましたが、おひざ元の琴平町を直撃した大水害や疫病の流行などにより、遅滞として進まず、完成まで、なんと30年の歳月がかかりました。その間、金堂建立のため、全国から集められた腕利きの宮大工さんは、父から子、子から孫へと世帯交代し、最終的には琴平町に定住されたといわれます。参道沿いに構える一刀彫のお土産物屋さん、この時招聘された宮大工の子孫だといわれています。社殿は全体に美しい彫刻が施され、天保建築の粋を集めた総檜の二重入母屋造です。国の重要文化財に指定されています。



旭社全景

講談で有名な森ノ石松と旭社のエピソード。そそかしい石松は、立派な旭社(当時は金堂)を御本宮と間違え、清水次郎長親分から預かった刀を奉納して、御本宮に参拝せずに帰ったと伝わります。旭社は当時から、金刀比羅宮境内最大の建築物であります。

また、楼上の「降神観」の額は、十返舎一九の『金毘羅参詣続膝栗毛』にも紹介されていますが、清国第一級の書家として知られる王文治の筆によるものです。伝承では、同国の劉雲台が、海上遭難時にこんぴらさんのご加護を得て助かり、神恩感謝のため奉納されたといわれています。こんぴらさんのご神威は海を渡り外国にも伝播していたようです。

金毘羅信仰の結晶ともいえる旭社。ご参拝の折には、ぜひ一度間近でご覧ください。

◆ 執筆者 ◆



金刀比羅宮 琴陵 泰裕氏



◆旭社に奉納したとされる「肥前国忠吉」森ノ石松が旭社に奉納したという謂れのある刀



◆「降神観」の額
清国の翰林院侍讀探花及第 王文治の筆で、同国の劉雲台の献納



◆旭社の額
幕末の公卿、綾小路有長の筆



◆旭社の装飾
上層の屋根裏には巻雲が、そして柱間・扉には人物・鳥獣・草花が彫刻されている。どれも稀に見る華麗な装飾

